

目指せ「飛び込み大国おおいた」！

飛び込み

別府市営青山プールの飛び込み台から小さな体の女の子が笑顔でコーチに手を振っている。コーチから合図が出ると、美しいフォームで水の中に飛び込んでいく。テレビで観たことはあったが、やはり実際に飛び込む姿を目の前で見ると、見とれてしまう。滞空時間は短いが、残像がスローモーションのように目に焼きついた。

「飛び込み競技の見方は、空中でのフォームや高さ、放物線の描き方などいろんな要素がありますが、一番端的に言うとなつすぐに水に入ってしびきがたたないのがいい飛び込みなんです」とコーチの茶木葉さん。小学生の時は競泳をやっていた茶木さん、京都国体で競泳の鈴木大地選手を応援に行った際、隣でやっていた飛び込みに魅了されてしまったのだそう。「私もやってみたい」と思って体験教室に行ったらはまってしまった。思えば鈴木選手が私の人生を変えたようなもの」と笑う。その後はまさに飛び込み人生、全日本シנקロダイビング(*)では優勝、個人では1mの飛び板飛び込みで2位という輝かしい成績の持ち主だ。

そんなコーチについて練習に励むジュニアの末廣優志君は、飛び込みを始めてまだ一ヶ月弱。6年間競泳をやっていたが、「市の広報誌で体験教室の募集を見た。ためしにやってみたら『センスがある』って言われてやる気になった」と言う。今は飛び込

みが楽しい、ととても意欲的だ。プールで飛ぶ姿を見ると、始めて間もないとは思えないほどきれいなフォーム、確かにスジの良さを感じさせる。

小学校2年生で飛び込みを始めたという日高麻美さんは現在中学1年、今年度の全国JOCジュニアオリンピックカップ大会で4位入賞という期待の星だ。「水の中にきれいに入ると気持ちいい。最初は3mも飛べなかったけど、種目が始めてできたときはほんとうにうれしい」

ひとつずつできなかったことが
できるようになる、その
達成感、充実感が先につながる
エネルギーになる。

現在、ジュニアのメンバーは8名。茶本コーチは「大分には30年間飛び込みのクラブがなかったの、まずは選択肢のひとつとして普及したい。そしていつかは」大分県は飛び込み大国「と言われるように頑張ります」と意気込む。

(※)2名1組で同時に演技を行い、演技の完成度と2名の同調性で順位を競う種目



柔軟体操を指導するのは、母親の美恵子さん。現在は主に小学生の指導を受け持っているという



小学校2年生～5年生の女の子たち。バレエや水泳の経験がある子や、中には4才からリズム体操をやっていた子も



友達に誘われて始めたという田金日乃菜さん。「演技しながらずっと息ができない時があって、その時はさすがにきついです」と笑う

いつか観客を泣かせる演技を
 ～おおいたの女優の卵たち～
 シンク口

大分県でシンク口の選手育成を始めたのは矢野直香さんだ。1988年のソウルオリンピックでは小谷実司選手がシンク口ソロで銅メダルを獲得、日本中がシンク口人気で沸いていた。中学生だった矢野さんは、ぜひ自分もやってみたいとクラブを探したが、当時大分にはシンク口のクラブはなかった。そこで大学進学を待ってシンク口を始め、指導の資格を取り、卒業後大分に戻りシンク口選手の勧誘を始めた。ゼロからのスタートだったが、徐々に生徒は増えた。現在、矢野さんは県立学校教諭のかたわら、母の美恵子さんとともに、小学校2年生から高校生まで14名の生徒にシンク口を指導し普及に務めている。

中学校1年生の田金日乃菜さんは

「練習は厳しいけど、演技しているときは楽しい。シンクロはきれいだしすごい技もできるし本物のスポーツ競技だと思う」と少し照れながら話してくれた。

矢野直香コーチは「指導で一番、



シンクロの指導を始めて12年目になる直香さん。シンクロは、自分の思いが表現できるのが大きな魅力だと語る

るのは、社会性を養うこと」と言う。

「シンクロはみんなと同じ動きをするので、自分の失敗はみんなの失敗なんです。

集団の中で自分勝手な行動をとらないことが大切」と語る。

あいさつや礼儀、周りへの感謝の気持ちを持つこと、などの人間力の部分をまずは築いていく、それが結局は力につながるという。

「シンクロは体操・バレエ・ダンス・競泳……いろんな要素が含まれているので、練習はいろいろな時間があつても足りないんです。競泳から転向したとき、こんなきつい競技はないって思いました」

それでもシンクロには自分を表現する、女優になれるという魅力がある。「世界トップクラスの人は、会場が呑み込まれてしまうような、観客を魅了する演技ができる。

そんな演技を観たときは、涙が出てきます」

陸の上ではまだあどけない女の子たちだが、ひとたび水の中に入れば頭から指の先までピリッと伸びて堂々と踊り始め、顔つきもなんだか風格が出てきたような…。大分県から未来の“大女優”が生まれるのが楽しみです。



הַיְּחִידָא דְּאַרְבֵּינוּ.

「シンクロはみんな」

で同じ動きをするので、自分の失敗はみんなの失敗なんです。



集団の中で自分勝手な行動をとらないことが大切」と語る。

あいさつや礼儀、周りへの感謝の気持ちを持つこと、などの人間力の部分をまずは築いていく、それが結局は力につながるという。

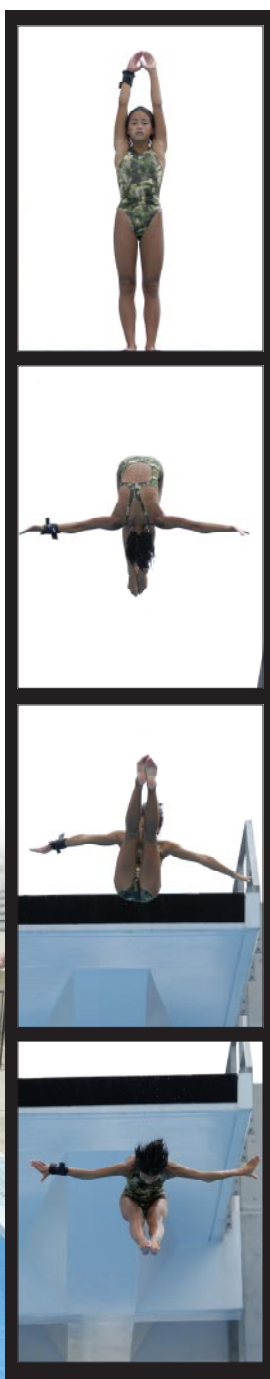
「シンクローは体操・バレエ・ダンス・競泳……いろんな要素が含まれているので、練習はいくら時間があっても足りないんです。競泳から転向したとき、こんなにきつい競技はないって思いました」

それでもシンクロー

女優になれるという魅力がある。一世トッ
プクラスの人は、会場が呑み込まれてしま
うような、観客を魅了する演技ができる。

そんな演技を観たときは、涙が出てきます」

階の上でまたあとにない女の子たちだが、ひとたび水の中に入れば頭から指の先までピリッと伸びて堂々と踊り始め、顔つきもなんだか風格が出てきたような……。大分県から未来の“大女優”が生まれるのが楽しみだ。



茶木さんの夫の康寛さんも、飛び込みの指導者。1歳3ヶ月の息子さんは、既に飛び込みデビュー済だという。「人に落としてもらって、人にすくってもらってですけど(笑)」。将来が楽しみだ



ベルトを付けてロープに繋がれ、空中感覚を養う、スパットィングという器具。冬の間は、スパットィングやトランポリンなどを使った陸上での練習がメインとなる

